

第6回抗微生物薬適正使用（AMS） 等に関する作業部会	参考資料1
2024(令和6)年11月19日	

第9回厚生科学審議会感染症部会 薬剤耐性(AMR)に関する小委員会	資料3
2024(令和6)年10月16日	

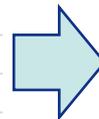
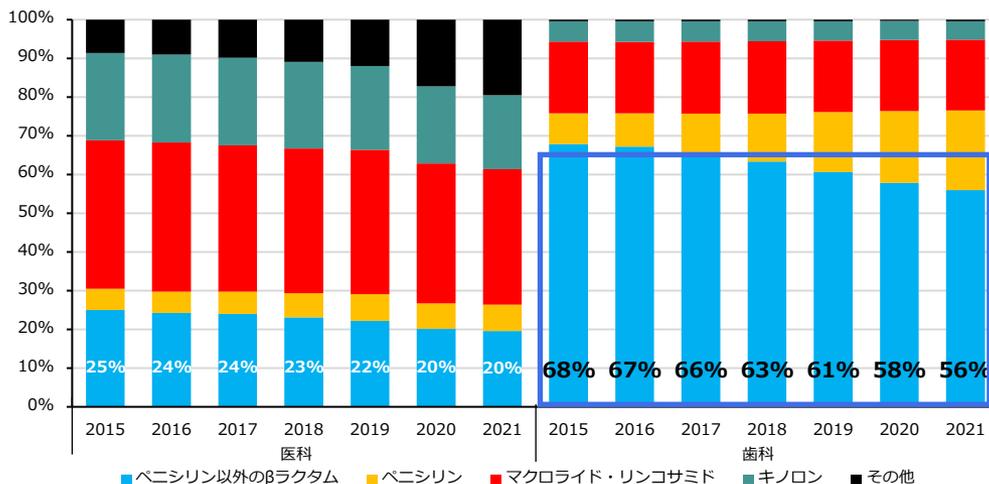
第9回厚生科学審議会感染症部会 薬剤耐性（AMR）小委員会

抗微生物薬適正使用の手引きの 改訂について（案）

現状

- 歯科領域に関する抗菌薬適正使用はアクションプランに記載がほぼないものの、歯科領域においても、種々の症例において抗菌薬を投与することがあり、その使用については抗菌薬の適正使用の観点を考慮することが望ましい。
- 全国抗菌薬使用量調査によると、内科領域における内服抗菌薬は90%以上であり、**歯科領域では99%が内服抗菌薬である**。さらに、歯科領域においてはペニシリン以外のβラクタム系抗菌薬が半数を占め、その中でも**第3世代セファロスポリンが大部分を占めている**。
- 本邦においてもJAID/JSC感染症治療ガイドや歯周病患者における抗菌薬適正使用のガイドラインに抗菌薬の使用方法が記載されているものの、使用量調査より、必ずしもガイドラインに準じた処方になっていない状況があると推測される。

全国抗菌薬使用割合(%) 2015-2021 内科と歯科に分けた内服別抗菌薬種類による集計



ペニシリン以外のβラクタム	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
第一世代セファロスポリン系	2%	2%	2%	2%	2%	2%	2%
第二世代セファロスポリン系	17%	16%	15%	15%	15%	15%	15%
第三世代セファロスポリン系	79%	80%	81%	81%	81%	81%	81%
その他	2%	2%	2%	2%	2%	2%	2%

課題

- 抗菌薬使用量や使用割合より、医療現場では抗菌薬使用に当たりガイドラインを必ずしも厳守していないと推測され、更なる適正使用の推進に向けた取り組みが求められる。
- 歯科領域の抗菌薬処方、多くが歯科診療所で行われていると推測され診療所内での処方が完結するケースがある。このような状況を踏まえると本質的に製薬企業等との利益相反(COI)の考慮が必要であり、国から適正使用の情報を発信することが必要である。
- 以上を加味して、**薬剤耐性(AMR)対策アクションプランにおける戦略4.1を基に、歯性感染症に対する治療薬や術後感染予防抗菌薬適正使用等の歯科領域の適正使用に向けた包括的な手引きを作成してはどうか。**

概要

- 手引き第三版では、外来編と入院編の2編構成とし、外来編の内容の更新を行うとともに、新たに入院編を書き下ろした。
- 「外来編」成人・学童期以降の小児、乳幼児を対象に急性気道感染症、急性下痢症にて抗菌薬投与が必要な状況と適切な抗菌薬投与について解説
- 「入院編」医療機関で入院患者の診療に関わる様々な医療従事者にとって重要な基礎知識を解説し、更に、薬剤耐性菌を中心に具体的な抗菌薬治療について解説

外来編

- 成人・学童期以降の小児編
 - ✓ 急性気道感染症
 - ✓ 急性下痢症
- 乳幼児編
 - ✓ 小児における急性気道感染症の特徴と注意点
 - ✓ 小児の急性気道感染症各論
 - ✓ 急性下痢症
 - ✓ 急性中耳炎

歯科領域編

入院編

- 入院患者の感染症に対する基本的な考え方
- 入院患者の感染症で問題となる微生物
 - ✓ 黄色ブドウ球菌 (*Staphylococcus aureus*)
 - ✓ 腸内細菌目細菌 (*Enterobacterales*)
 - ✓ 緑膿菌 (*Pseudomonas aeruginosa*) 等

※事務局にてダイジェスト版を作成予定

事務局案

- 手引き第四版では、本体（外来編、入院編、歯科領域編）・別冊・補遺の3編構成とし、外来編・入院編の **内容の整理および更新** を行うとともに、**新たに歯科領域編** を書き下ろしてはどうか。「**歯科領域編**」では**歯科診療に関わる医療従事者を対象に抗菌薬適正使用について解説**する予定である。
- 「薬剤耐性(AMR)対策アクションプラン2023-2027」においては、戦略4.1における取組として手引きの改定、内容の充実及び臨床現場での活用の推進を掲げており、今回、歯科領域における抗菌薬の適正使用に関する内容を追加することを目的として、**AMR小委員会 抗微生物薬適正使用 (AMS) に関する作業部会を開催する（11月中旬開催予定）**。